

**速水御舟** 日本画家。日本画革新に取り組み、新たな試みが賛否両論起こし、さらに展開を図るうち、早世した。  
はやみぎよしゅう  
**日清戦争始**・1894 = 東京浅草茅町の質屋でのち銀行を創立した蒔田良三郎の次男として生まれる。

田中正造直訴1901 = 7歳：浅草育英小学校に入学。

日比谷公園・1903 = 9歳：幼い頃から絵が好きで、友達の親の蒔絵師のところで遊ぶなどした。

日露戦争終・1905 = 11歳：高等科へ進み、

韓国反日暴動1907 = 13歳：育英小学校を卒業。

アラギ 創刊・1908 = 14歳：勧められて家の向いの松本楓湖の安雅堂画塾に入門。

韓国併合・1910 = 16歳：初めて展覧会(異画会)に出品するや、

大逆事件判決1911 = 17歳：\*作品が宮内省買上となる。今村紫紅に会い(紅兎会)に入会。

明治天皇没・1912 = 18歳：文展で落選した「萌芽」を、

大正政变・1913 = 19歳：異画会に出品、原三溪にその才能を認められ、以後援助を受けるようになる。

第一次大戦始1914 = 20歳：母方の速水家についてから御舟と改号。日本美術院が再興されると、兄弟弟子今村紫紅を指導者とする(赤曜会)の新鋭として再興院展に参加。紫紅の“南画は印象派よりも印象的”という新南画の理論を実践し、明るい色彩、大胆な構図、新鮮なモティーフの「近村」を発表。

ロシア革命・1917 = 23歳：\*京都に取材した「洛外六題」(焼失)は横山大觀、下村觀山らに激賞され、院展同人に推された。

本格政党内閣1918 = 24歳：京都修学院林丘寺内雲母庵に移り、第5回院展に「洛北修学院村」を発表。このころより御舟自身“群青中毒にかかった”と述べているように群青系の色調の作品が多くなる。

ベーリン条約・1919 = 25歳：浅草駒形で市電にひかれ左足切断の災禍にあうが屈することなく、ますます制作にうちこんでゆく。

大暴落・1920 = 26歳：\*京都に帰ってデューラーへの関心を示し、近代日本画中最も厳密にして濃厚な写実を試みた「京の舞妓」を第7回院展に出品。賛否両論非常に。

原敬首相暗殺1921 = 27歳：帰京して、結婚。以後、参禅したりして精神修養にもつとめ、近代人の自覚の上に立った自己の主張を鋭敏に展開、新画風を探っては壊し、壊しては組みたて、ヨーロッパにおける当時のフォービスマ、キュビズム、またシュルレアリスムの動向とその理論をつぎつぎに注目しつつ、中国の院体画を学び、宗達や琳派の装飾的構成をたくみに摸取しながら新画境の創造に徹した。

護憲三派圧勝1924 = 30歳：「曉靄」、

治安維持法・1925 = 31歳：「炎舞」、

金融恐慌・1927 = 33歳：「奈良の家、京の家」、

共産党事件・1928 = 34歳：「翠苔綠芝」、

世界恐慌・1929 = 35歳：「名樹散椿」など、彼の生命の燃焼を示す作品といえよう。

海軍軍縮条約1930 = 36歳：美術使節の一員として、イタリアへ渡航。

満州事変・1931 = 37歳：「女」。ベルリンの日本現代画展で「雪夜」が好評を博したため、寄贈。

五一五事件・1932 = 38歳：「花の傍」、

帝人獄事件1934 = 40歳：「白日夢」を院試作展に発表するかたわら、墨絵に傾倒し、新たな展開を試みるべく裸体描写に取り組み「婦女群像」の制作にかかるが果たさず、

芥川直木賞始1935 = 41歳：腸チフスのため急逝した。